

---

# 幽霊検証/3Z

深海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊検証 / 3Z

### 【Nコード】

N6831A

### 【作者名】

深海

### 【あらすじ】

クラスメートの花子から、使われていない更衣室にまつわる怪談を聞いたメンバー。神楽の提案で検証しに行くことに。

## ghost 1

男子更衣室にある使われてないロッカーの右から二番目から、毎晩の様に男の子のすすり泣く声が聞こえるの。

シクシク…シクシク…。

とても悲しそうな泣き声が。

その男の子はね、いじめを受けてて、ある日ロッカーに閉じ込められちゃったんだって。そしたらそのロッカー、鍵が壊れて出てこれなくなっちゃったの。

次の日、男の子がいなくて騒ぎになって、いじめてた張本人達がヤバイって更衣室に行ったの。そしたら…。

ガターン！

「きゃー！」

「ひっ！」

夕暮れに照らされる教室の中、ほうきを持ったおかつぱの女の子を囲む新八、神楽、お妙、沖田、土方。

どうやら掃除を途中で投げ出し、話に夢中になっていたようだ。そこへいきなり机が倒れ、そこにいたおかつぱの女の子以外の面々は皆驚く。

見ると見事に引っくり返っている土方。

「何してんだイ土方さん」

「いや…蛍光灯の埃を落とそうと思ったらバランス崩してよ」

顔を真っ青にし、怖がっているのはばれただが平静を装う土方。  
新八は額に手を当て溜め息をつく。

「もう、土方さんのせいで台無しじゃないか…それにしても花子さんの話は本当にあった事みたいで怖かったなあ。あ、ちょっと神楽ちゃん！」

オチを台無しにされた事を怒り土方に掴みかかる神楽を止めに入る。

「あらあら神楽ちゃん。女の子が駄目よ、はしたない。おとなしくしないとケツの穴にほつきをぶちこむわよ」

「お妙さん、その台詞もはしたないんじゃないですか」

汚い言葉を吐くお妙はそれでも笑顔で、なんとか土方から神楽を引き離れた新八がつつこんでも全く動じない。

「…今の話ね、本当の事なんだよ」

その声に、すっかり存在を忘れていた花子を一斉に見る皆。一瞬で教室が静まり返った。

「どういう事だい」

「3年P組のさっちゃん。1年Q組の屁怒呂君。1年X君の松平君。他にも何人も本当に泣き声を聞いているの」

信じられないと顔を見合わせる。そんな噂は初めて聞いたのだ。神楽が新八の腕を振り払い、何かを企んでいる様に口元を歪める。それを見た新八は嫌な予感がした。

「か…神楽ちゃんまさか…」

「今晚皆で検証に行くネ」

「おつ俺はそんなくだらねーモンに参加しねえぞ。なあ総悟」

土方が沖田を振り返ると、沖田はいつの間に用意したのか、皆に見える様に一枚の紙を掲げた。

「何だ…？」

「今晚ここに書いてる物を各自持って十時に校門前に集合でさア」

「マジか…」

土方の顔はこれ以上無理と言う程に青ざめていた。

一、時間・場所

P M 2 2 : 0 0 銀色魂学校校門前

一、持ち物

沖田…懐中電灯

土方…数珠

新八…メガネ

お妙…武器（己の拳）

神楽…非常食

c o n t i n u e

そして21時45分。辺りはすっかり暗くなり、普段明るい陽射しに照らされた学校とは一味も二味も違い、薄気味悪い。非常口の緑色の光がなんとも言えない雰囲気を作り出していた。

「あ、神楽ちゃん！」

新八とお妙が学校に着いた時には、すでに神楽が門の前にしゃがんで待っていた。

「姐御に新八、準備はオーケーアルか」

手に持っていた酢昆布を得意気に見せ言う神楽に、新八はメガネを光らせ、お妙は笑顔で握り拳を見せた。

「皆さんお揃いで。さ、早速行きましょうや」

ライトが付いたヘルメットを被り、何か大きな物を引きずって現れた沖田。暗くてよく見えなかったが、近付いてくるにつれ、それがふてくされた土方だとわかった。

「早速って言っても鍵締まってるですよ？」

「安心しなせエ。帰り際に不倫中に外してた結婚指輪をなくした。

戸締まりはして帰るから鍵を貸してくれて言ったらこの通り。馬鹿ばっかで助かりますア」

沖田の手には鍵の束が握られていた。こんな簡単に生徒に鍵を預ける学校なんて有り得ない。

新八は頭痛を覚えた。転校しようか等と考えている間に沖田は門を結んでいた太い鎖を外す。

「よし……幽霊退治アルヨ！」

先頭を切って歩き出す神楽。皆それに続いたが、ただ一人土方だけはその場に立ったままだった。それに気付いた沖田が振り返り土方に歩み寄る。

「な……なんだよ。ここまで来たんだからもついいだろ。後はお前らだけで行けよ。ここで待つてようと思います」



沖田は何も言わず土方の襟首を掴むと、踏ん張り歩こうとしない己よりも大きな土方をズルズルと引きずって行った。土方はポケットの数珠を取り出しきつく握り締めた。

「うわゝ夜の学校って初めて来たけど…とにかくすごいな…」

カッンカッンと足音が響き、その後ろからは靴を擦る様な音が聞こえてくる。

先頭に立っているのは神楽。少しも脅えた様子はなく歩いて行く。お妙は神楽に腕を絡め、ピッタリとくっついていく。その二人の後ろに隠れる様にしているのは新八。なんとも情けない姿である。

校内は非常口を知らせる小さな看板の光があるお陰で、思ったよりも明るかった。だがやはり足元はおぼつかない。

前ばかり気にしていた新八の足が、廊下に備え付けてある消火器を蹴り倒した。

カーン…

「いやああー！」

誰もいないために大袈裟に響く音。それに驚いたお妙が、辺り構わず殴り散らす。

「ちよっ！お妙さん！僕が消火器蹴ぐふっ！」

お妙の拳が綺麗にヒットし、倒れる新八。お妙はそのまま窓硝子を割ったりしながら暗闇に消えていった。

「あーあ…どうするんデイ。これ…」

お妙と同じく驚き逃げようとする土方をしっかりと捕まえている沖田。

「僕は何も知らない。見てない。何もしてない…」

「姐御…安らかに眠るアル…」

お妙が消えた暗闇に向かって手を併せる神楽。皆もそれにならって手を併せると先へ進んだ。

c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

「とうとう着いちゃいましたね…」

「何も聞こえないネ」

「開けやすぜイ」

「おい、ちよつと待て総悟。今ならまだ引き返せるぞ」

男子更衣室にたどり着いた四人。土方が止めたにも関わらず、沖田は躊躇いもなく扉を開けた。

皆息を飲み、暗い室内に目を凝らして耳を澄ませる。

シクシク…。

皆目を見開き固まる。確かに泣き声が聞こえた。

シクシク…

男の泣き声が室内に響き渡る。皆それぞれ、お前が行けと指を差し合う。これではちがあかないと思った沖田は土方を突き飛ばした。

「うおっ！」

ガタンと音を立てロッカーにぶつかる土方。使われていないロッカーの右から二番目に。土方の全身からどつと汗が吹き出る。

錆び付いた鈍い金属音を立てゆっくりと開かれていく扉。そこには…。

「うわああー！」

その姿を確認する前に机の下に潜り込む土方。他の三人の視線はロッカーに釘付けた。

「あれ…トシか？それに皆も…助かったあ…」

そこから出てきたのは、なんと近藤。皆の姿を見て安堵の溜め息

をついている。

「こ、近藤さん！こんなところで何をしてんですか！」

「土方さん、幽霊の正体は近藤さんですぜ。土方さん、土方さん」  
何度呼んでもガタガタと震えているだけの土方。

近藤は後頭部を掻き、豪快に笑った。

「いやあ、部活の後うつかり寝ちまつてな。起きたら真っ暗だし、鍵は開かないし、今夜はここで夜を明かそうと思ってたんだよ」

溜め息をつく新八と神楽。すっかり拍子抜けしてしまった。

「だからって何でロッカーの中で泣いてるネ。しかも噂のロッカーで。タイミング良すぎるヨ。このゴリラが」

「え？俺泣いてなくあつ！」

突然近藤の顔面に消火器が直撃した。驚いた新八と神楽が振り返ると、そこには目が虚ろなお妙が立っていた。

「幽霊がなんぼのもんじゃア！アタイがぶっ殺してやらア！総長の座はアタイのもんじゃアア！」

「ヤバイヨ！姐御が御乱心ネ！新八、取り押さえるアル！」

暴れるお妙を必死に押さえ込む神楽。だが新八は何やら考え込んでいる。

「ちよっ…ちよーつと待つて神楽ちゃん…近藤さん、泣いてなつて言いかけてたよね…」

「ど、どういう意味ネ」

「泣いてない…って事かイ？確かに近藤さんは泣いてた様に見えねーや」

気絶している近藤の頬には涙の跡は見られず、先程まで泣いていたのなら睫毛くらい濡れててもよさそうだが、その痕跡も見られなかった。

三人の視線がロッカーに集まる。

「どういふ事ネ！扉が閉まつてるアル！」

確かに開いていたはずの扉がピタリと閉じられていた。もちろん誰も触れてなどいない。

暴れていたお妙も正気を取り戻し、ロッカーを見つめた。

「どういう事なの新ちゃん…」

「しっ！何か…」

シクシク…

「な、泣き声かい？」

シクシク…シクシク…

ギギギギギギ…

「ぎいやあああ！」

「いやあああー！」

「へ…ヘルペス！ヘルペスミー！」

「本物がおいでなさったみてーだなア…逃げろー！」

それぞれ叫び声を上げ一斉に走り出した。気絶した近藤と、机の下にいる土方を残して。

c o n t i n u e

## ghost 4

シクシク…シクシク…

「ん？何かあったか…？」

叫び声を聞き、我に返った土方。顔を上げると、体をこわばらせた。机の向こうに何者かの足が見えたのだ。男物の制服の様だった。

シクシク…

なぜか近藤が倒れているのが見えた。だんだんと近付いてくる足は誰かの悪戯だろう。

土方は震える声を振り絞った。

「おい、近藤さん。何でそんなところに寝てんだ？そ…総悟？それとも新八か？」

机の前でピタリと止まったその足がゆっくりと動いた。どうやら机の下を覗こうとしている様だ。

「お…い…悪ふざけはやめろよ…」

シクシク…シクシク…

その足の持ち主が机の下を覗き、土方はその人物としつかり目が合ってしまった。

次の日男の子がいなくて騒ぎになって、いじめてた張本人達がヤバイってロッカーに行ったの。そしたら…。

シクシク…

「おい！柳！いるのか？」

シクシク…

「まさか開かないんじゃない？」

「ちっ！おい！今開けてやるけど俺らが閉じ込めた事チクッたらぶつ殺すからな！」

ギギギ…

「っ！？」

「いない！？」

シクシク…シクシク…

「でも泣き声が…」

僕ね、いじめられてたんだ…。

「ひいっ！柳の声だ！どこから！」

君たち友達になってくれる？僕一人も友達いないんだ。

「お…俺らが悪かった！許してくれ！」

本当？　嬉しいよ…。

「ぎゃあああー！」

「大変だ！土方さんがいない！あと近藤さんも！」

「もう戻りたくないネ！」

「ほっときなせエ。あんなマヨ野郎」

全速力で校門まで駆けてきた四人。肩を上下させ苦しそうに呼吸をしながら校舎を振り返る。

「うわあああ　！」

聞こえてきた悲鳴に顔を見合わせる。

「今の…」

「土方さん…よね？」

「取り憑かれたアルか！？取り殺されたアルか！？」

「あーあ…お気の毒にねイ…」

その後ね、先生達が悲鳴を聞きつけて更衣室に行ったの。そこには目をカッと見開いた数名の生徒が倒れていて、もうすでに息はなかったんだって。何があっただって驚く先生達の前でいきなり口ッカーが閉まったの。そしたら男の子の悲しいすすり泣く声が…。

シクシク…

その男の子は今も見付かってないの。今もあのロッカーの中で友達が来るのを待ってるのかもしれないね。

f i n



## オマケ？（前書き）

前回で完結してるで読まなくても大丈夫ですが、オマケみたいなものです。

## オマケ？

気絶していた近藤が起き上がり、倒れている土方を見下ろしている口から血を流した苦悶の表情を浮かべる男の子の横に立った。

「先生、やりすぎじゃないですか？トシのやつ泡吹いてますよ」

先生と呼ばれた男の子が顎辺りに手をかけ、顔を剥がした！…ではなくゴムのマスクを外した。男の子の正体は教師の銀八だったのだ。

「それでも足りないぐらいだったの。ま、これでこいつらも少しはおとなしくなるでしょ」

今回の事は全て銀八が仕組んだ物で、問題児たちを少々懲らしめようと計画したのだ。だが、いささか上手くいきすぎた様だ。

「それにしてもこうも上手いくとはな…」

「ああ、花子さんのお陰ですよ！すごい話がリアルで皆怖がつてましたから。おい、花子さん」

口元に手を当て花子と呼ぶ近藤。どこにいたのかすぐに現れた花子は銀八に笑いかける。その笑顔を見た銀八の表情はひきつる。

「その子…誰？」

「何言ってるんですか先生、花子さんですよ！いくら存在感がないからって先生が忘れないでくださいよー！って俺も花子さんの事忘れてましたけどね！」

花子の肩に手を置き豪快に笑う近藤。銀八は二人からゆっくりと後退り離れる。

「…花子なんて生徒いないんですけど…」

「…え？」

ピタリと笑うのを止める近藤。肩に置いた手をそのままに、花子の方を見れずにまっすぐ銀八を見る。

「あのね、いじめられてたのは男の子じゃなくて女の子なんだよ」  
近藤から離れロッカーに歩み寄る花子。

「その女の子、友達いなくてとても寂しかったの。でも、今日少しでも皆と話せて寂しくなかったんだって。だから誰も連れて行かないよ」

花子は何も言わずに固まっている二人に向かって微笑むと、スーッと音もなくロッカーに消えていった。右から二番目のロッカーに。

f i n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6831a/>

---

幽霊検証/3Z

2010年10月10日22時37分発行